

「小学生による身近な生き物調査」調査結果報告書

子どもたちが、身近な生き物の生息状況を把握し、生き物の生息環境を守り育てていくことの大切さを学習するため、「小学生による身近な生き物調査」を実施しました。今年度は、市内の小学校の協力により、校区ごとに6種類の外来種の生息状況を調査しました。

1 調査概要

(1) 調査対象の生き物

外来生物6種類

- ①セイタカアワダチソウ
- ②オオオナモミ
- ③アレチヌスビトハギ
- ④アメリカセンダングサ
- ⑤ミシシippアカミミガメ
- ⑥アメリカザリガニ

(2) 調査期間

令和3年10月31日(月)～12月3日(金)

(3) 調査場所

姫路市内の全校区

(4) 調査員

市立小学校の6年生児童

(5) 調査方法

各小学校区毎に、調査期間中に自宅周辺の公園、河原、街路などで外来生物を見た人の数を調べてもらいました。

2 令和3年度調査結果

(1) 調査結果一覧表(別紙のとおり)

各種類毎の外来生物を発見した児童調査員数(発見者数)を児童調査員総数で割ったものを「発見率」として算出し、それぞれの種の各調査年度における発見率を表1に示しました。

表1 種ごとの発見率(調査員に対する発見者数)の推移

	セイタカアワダチソウ	オオオナモミ	アレチヌスビトハギ	アメリカセンダングサ	ミシシippアカミミガメ	アメリカザリガニ
令和3年	51.2%	47.8%	54.8%	72.6%	33.1%	35.9%
平成28年	53.2%	61.2%	67.0%	74.8%	32.5%	38.8%

小学生による身近な生き物調査では、さまざまな身近な動植物を対象としています。その中でも外来生物で調査をお願いしている種類は、広く周知が進んでいる種類であることから、調査の結果は、かなり正確な

値を示していると考えています。

令和3年の結果では、平成28年に比較し、全種類において発見率が減少しました。植物においては、特にオオオナモミが15ポイント近く減少しています。オオオナモミは、ひつつきむしの中でも、よく知られている植物ですが、低い値でした。実際に、近年、姫路市全域で、本種を見かける機会が減っているように感じています。

セイタカアワダチソウについては、平成23年度から調査を行っていますが、平成23年度の実見率が69%でしたので、平成28年に続いて今年度も減少しています。それでも、50%以上の発見率があり、市内全域で確認されていることから、衰退しているような状況にはありません。

ミシシippアカミミガメとアメリカザリガニは、児童によく知られる外来生物ですが、発見率は3割程度と植物に比べて低い水準でした。これらの種類は、水中にすむため、池などの水辺を観察しないと見かけないことが影響しているのかもしれませんが、平成28年からは、大きな増減の変化は見られませんでした。

表2 75%以上の発見率があった種の学校数の推移

	セイタカアワダチソウ	オオオナモミ	アレチヌスビトハギ	アメリカセンダングサ	ミシシippアカミミガメ	アメリカザリガニ
令和3年	13校	10校	17校	33校	4校	3校
平成28年	18校	24校	29校	39校	1校	4校

それぞれの種について、児童調査員の75%以上が発見した学校の数を表2にしました。平成28年度と比較して、ミシシippアカミミガメを除き、全ての種類で減少しています。特に、オオオナモミとアレチヌスビトハギにおいて、10校以上が減少しています。一方のミシシippアカミミガメは、4校の増加がありました。

表3 学校ごとの発見種数

発見数	6種類	5種類	4種類	3種類	2種類	1種類
令和3年	56校	6校	1校	1校	0校	0校
平成28年	51校	6校	1校	2校	2校	0校

※(%)は、当該年度参加校数における割合

学校ごとの発見した種類数を表3にしました。参加した8割以上の学校が6種類全部を見つけてくれました。これは、6種類の多くが、姫路市全域に分布し、かつ児童が6種類の外来生物をしっかりと見分けていることを示しています。

3 令和3年度調査結果

(1) 調査結果一覧表（別紙のとおり）

(2) 分布マップ（別紙のとおり）

※種類別の調査は平成28年度から実施

4 まとめ

身近な生き物調査は、毎年、6年生児童にお願いしていますが、対象種によっては、種類の見分けがつきにくく、結果の正確性に影響していることが懸念されるものもあります。その中で、今回の調査対象種である「外来生物」については、児童はしっかりと見分けてくれているようで、調査結果はかなり正確であることがわかりました。

最近、ヒアリやナガエツルノゲイトウ等の外来生物の被害が新聞やテレビニュースの話題として取り上げられ、身近な暮らしの中で外来生物について考えることが多くなっています。今回の調査種であるミシシippアカミミガメとアメリカザリガニは、ため池が多く点在する東播磨地域では大きな問題となっており、行政や地域住民が協力して対策に取り組んでいます。そして、外来生物法により、規制されていく方向です。

姫路市域においても、近年、外来生物の侵入の問題は深刻化しています。植物では、ミズヒマワリやアレチウリ、ホテイアオイなどは河川周辺に繁茂し、駆除が困難な状況です。また、動物では、アライグマ、ヌートリア、ハクビシンの被害が深刻で、安富や夢前の山の中でも被害が出ており、アライグマとヌートリアについては、姫路市が計画的に駆除しています。さらに、今後、ヒアリ、クビアカツヤカミキリ、ナガエツルノゲイトウなどの侵入が心配されています。

今回、調査いただいた外来生物は、小学生でも見分けのつきやすいものを選定しました。そのため、それぞれの種において、姫路市全域に分布していることがわかりました。そして、オオオナモミの分布が減少していることもわかってきました。外来種の中でも、他の種類との間に生存競争が行われ、常に身の回りの自然が変化していることわかります。

身近な生き物調査を始めて20年近くが経ちました。5年ごとに対象種を変えているため、5年ごとの生き物の推移を数値として捉え、市域の生物相の変化を客観的にとらえることができます。姫路市の豊かな自然を守るためには、今の自然がどのような状況で、以前とどのように変わってきたかを把握することはとても大切な情報です。また、日常では意識していなかったところにも多くの生き物が生息していることを発見することで、身の回りにも豊かな生物の多様性があることを学ぶことができます。

最後になりましたが、今回の調査にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げますと共に、今後ともご協力をお願いします。